# 日本武士道と西洋武士道

高木　武

## 一

先日加藤博士から「日本武士道と西洋武士道」といふやうなことに關して、何か話をするやうにとの御話がありましたので、兼ねて、さういふ問題に就いて、聊か興味を有してゐるところから、淺學不才をも顧みず、卑見を簡單に陳べ、大方の是正を仰ぐことに致しました。

個人に個性があるやうに、民族にも亦民族に特殊なる性情がありまするが、この民族的特性は、その民族が永い間に於ける遺傳的蓄積の結果として、自ら感情、思想、信仰、及び、利害の共通性を育成し、その精神組織に、同一性と固定性とを帶ばしめたものと思はれます。

さて、我が國の武士道は、日本民族の同一性と固定性とを濾過蒸溜して、自制的に生み成した結晶で、武士道の特色は、取りも直さず、日本民族の特色に外ならないのであります。而して、吾等の祖先が我が國を擁護し、その發展を促して現代に及べる所以のもの、又、吾等現代日本國民が、祖先の遺志を繼承して、我が國を空前の盛運に向はしめ、世界一等國の班に列するに至らしめたる所以のも

のは、他にも原因がありませうけれども、主として、萬邦に卓絶せる武士道的精神の活用に歸せざるを得ないのであります。

翻つて考へまするに、西洋民族の間にも、シヴアリー卽ち西洋武士道と稱して、我が國の武士道と對照比較すべきものがありまして、是又、西洋民族の精神的美花をなして居るのであります。併し、西洋と日本とは、本來、風土を異にし、民族性情が同じくありませんので、彼我の武士道の間にも、自ら、特色の相違が少くないのであります。而して、彼我武士道の特質を比較するといふことは、やがて、兩民族の特性を比較する所以となるので、その異同長短を明らかにし、その形體を棄てゝその精神を採り、我の長所は益々これを助長し、又、短所あらば、他の長所を採つて之を補ひ、尙、現代世界の趨勢に應じて、巧みに之を適用致しましたら、我が國運の興隆を促し、民族の發展に資することが多大であらうと思ひます。それで、玆に、武士道の由來性質、封建制度との關係、德目、士法士規、宗敎との關係、武士の敎育、制裁、武士の扮裝及び武器、武士道と婦人、武士道の長所短所、武士道の感化、武士道の將來といふやうな問題につき、日本武士道と西洋武士道とを比較し、その異同長短を明らかにして見たいと思ひます。

## 二

日本武士道は、一言にして申せば、日本民族の固有の性情に基づいて成り立つたものといはれまする。即ち、忠君愛國とか、祖先崇拜とか、尚武任俠とか、寛仁温和とか、清明潔白とか、現世的實際的とか、積極的進取的とかいふやうな事柄は、我が民族に固有なる性情で、而も亦、武士道の主要成分を成して居るのに徴しますれば、容易に之を首肯することが出來ませう。而して又、我が固有思想は、古神道の要素となつて居るものが多いのでありまするから、武士道は、一面からいふと、神道にも根柢を有して居るものといふことが出來ると思ひます。斯樣に、武士道は、我が固有の性情に淵源して居りまするけれども、時代の推移につれて、尚、他の事情が、いろ〳〵附加して、愈々大成の域に達し、優秀善美なる特色を發揮して居りまする。而して、この附加せられた事情とは、民族精神の內的發展の側から申しますれば、外來思想、即ち儒敎や佛敎思想の包容同化でありまするが、その外的發展の側から申しますれば、武士の使命が齎せる境遇上の感化、即ち是でありまする。儒敎や佛敎は、元、印度に發生した敎義宗敎でありまするから、我が國情我が民族の性情に適應しない部分も少くないのでありますけれども、同化性の强烈なる我が民族は、巧みにそれを取捨選擇し、捨つべきを捨て、採るべきを採りて、固有性情に同化し、その內容を豐富にして居りまする。

又、武士の使命は君國を擁護するといふことを眼目として居りまするが、擁護の職責を果さんが爲には、君國に仇する敵と戰うて、勝利を得なければなりませぬ。隨つて、武士は優秀なる戰鬪者の資

格を養成すべき必要に迫られ、心身の修養、武術の鍛錬に工夫を凝らすやうになりましたが、その結果として、鐵のやうに頑強なる身體、生死の地に從容たる膽力、快刀亂麻を斷つの決斷力、岩をも透す强烈なる意力、百折不撓の忍耐力、一髮の危機をも見逃さぬ鋭敏なる觀察力、勤勉力行の習慣、絶妙なる武術等は、遺憾なく養成せられ、又、團體的行動を取る必要からして、服從及び共同の習慣、禮儀を重んずる心等を涵育し、遂に武士道の光彩ある發達を促しました。

西洋武士道も、その民族（主として日耳曼民族）に固有なる尙武的の性情に萠して居るものでありまするが、彼等民族の勇氣は、本來、粗剛でありましたので、之を理想化する必要が起り、茲に始めて、西洋武士道の端を發して居るやうであります。而して、粗剛なる武士の風尙を理想化したものは、神聖なる基督敎でありましたが、基督敎の勢力は絶大無邊でありましたので、何時しか主客顚倒し、武士は基督敎を擁護することを以て、その任とし、武士道は基督敎的軍制となつてしまひました。併し、西洋武士は、基督敎を擁護するといふ使命の爲に、優秀なる戰鬪者の資格を養成すべき必要に迫られ、心身の修養や武術の鍛錬に工夫を凝らし、自然に武士道の發達を促しました。

西洋武士道で、基督敎が武士道を理想化しましたのは、我が國の武士道に、儒敎佛敎が影響を與へたのに似て居りまするけれども、我に於ては、武士道が主にして、寧ろ儒佛二敎を同化したるに反し、彼に於ては、基督敎が主にして、武士道は、その方便として、感化使役せられたるの觀があります。

即ち、この點に於て、彼我その位置を顚倒して居ります。それで、我が武士道は、西洋武士道に比すれば、一層國家的傾向を有し、民族的性情との契合も亦深刻にして、國家及び國民に對して、頗る重要なる關係に立つて居るやうであります。

## 三

我が國では、封建制度、群雄割據の姿でありまするので、一國一城の主は、自衞の爲に、競うて武力を强大にせんが爲、多數の武士を養ひ、團體としては軍紀を振張し、個人としては心身の修養鍛錬を奬勵し、飽くまでも戰士としての資格を優秀ならしめんことを心掛けました。こゝに於て、武士道は、非常なる發展を遂げました。

西洋の封建制度には二通りありまして、一を主藩制、他を從藩制と申しまする。主藩制とは、大諸侯が、中央政府に對して獨立の態度を取り、その領地を自由に治めたもので、從藩制とは、小諸侯が大諸侯の前に跪いて、その身及び領地を保護せんことを希ひ、大諸侯と從屬の關係に立つて居るものを申します。而して、封建時代の諸侯は、武士たる必要はなかつたので、當時の諸侯、殊に從藩の小諸侯は、武士の團體に加入する者が少くありました。又、如何なる範圍の人も、武士に加入することが出來たので、藩臣であるといふことは、武士たる要件になりませず、隨つて、西洋武士道と封建制

度とは、餘り關係が深くなかつたのであります。

## 四

西洋武士道では、武勇を以て武士道の主德とし、之に忠義、寬仁、良智、禮儀、名譽等の諸德を隨從せしめ、稱して武士道の六德といひ、之を律するに正義の觀念を以てして居りまする。而して、此等の德目は日本武士道でも重んぜらるゝ所でありまするけれども、その德目の取扱方に、稍々輕重の差がありますし、德目の對象及び、それが含んで居る觀念にも、亦多少の異同があります。

我が武士道で首位を占めて居るのは忠義でありまするが、之は、彼に於ては第二位に置かれて居りまする。加之、忠義といふ觀念も、彼我の間に趣を異にして居りまする。我に於ては、忠義といふことは、君主に對し、己を沒して至誠を盡す行爲を稱し、彼に於ては、主として、基督敎の爲に力を盡すことを申しまする。我に於では忠といふことは、孝と共に考へられ、君に忠を盡すは、やがて親に孝を盡す所以となり、所謂忠孝一本といふことになりまするけれども、西洋の方では、さういふことはないのであります。良智は、西洋では主要なる德の一でありまするけれども、我に於ては彼に於けるほど重きを置いて居りませぬが、是は、我が民族の精神活動は情意を主として居るが爲と思はれます。禮儀といふことに就ても、我は端正なる容儀を修め、身體の諸官能を整へ、その身をよくして、

靈能を修練することに意を用ひて居りまするが、彼に於ては、主として宗教的莊嚴の氣分を深からしめん爲に禮儀を重んじて居るやうであります。又、名譽といふことも、我に於ては、祖先崇拜の性情からして、非常に家名を重んじて居りまするが、彼は、社會組織を異にして居りまするので、斯樣な傾向はありませぬ。右の外、我が國では、信義、質素、廉潔などいふ德目をも、なか〳〵重んじて居ります。

## 五

西洋武士道は基督教的軍制で　その目的は、地上に神の王國を恢擴するといふことにあつたので、之を律するに十條の法を制定し、武士の歸趨するところを明らかにして居りまするが、十條の士法とは、次のやうなものであります。

第一條　基督教を信じ、その道を守ること。

第二條　基督教を擁護すること。

第三條　弱者を扶け擁護すること。

第四條　祖國を愛すること。

第五條　敵を見て退くべからざること。

第六條　異教徒と殊死して戰ふべきこと。

第七條　神の道に背かざる限りは、封建制度の道を守ること。

第八條　虚言を吐かずして然諾を重んずること。

第九條　寛仁して衆を恵むこと。

第十條　正義正道を守り、罪惡と戰ふべきこと。

我が武士道では、彼に見るやうな公共的士法は制定せられて居りませず、多くは、學者又は武將が武士を教養せんが爲に作つた著書、家訓、家法、士規、壁書等に、武士の本分を說き、心得を示し、以てその行動を律すべき標準を示して居りまする。而して、その委曲は、人によりて、必ずしも同じくありませぬけれども、その趣意は、殆ど轍を一にして居りまする。今、此等に提說せられたる趣意を適當なる條文として示せば、次のやうでありまする。

一、主君に忠義を盡すべし。

一、正義を標準として行動すべし。

一、武勇を重んずべし。

一、名譽を重んずべし。

一、仁愛の心あるべし。

一、禮儀を正しくすべ！。
一、質素を旨とすべし。
一、節儉を重んずべし。
一、廉潔なるべし。
一、親には孝順、兄弟には友悌なるべし。
一、克己自制して忍耐の德を養ふべし。
一、皇國を愛護すべし。
一、學問に心掛くべし。
一、武術鍛錬すべし。
一、神佛を崇敬すべし。
一、心膽を練り士氣を養ふべし。
一、度量を宏大にすべし。
一、武士の職分を自覺して奮勵すべし。

さて、これを西洋の士法と比較しまするに、彼は民族的宗教的臭味を帶びて公共的でありまするが、我は國家的家族的修養的色彩を帶びて居りまする。

## 六

西洋武士道は基督教的軍制でありまするので、宗教によりて釀成せられ、宗教によりて支配せられ、宗教によつて使役せられ、宗教の爲に盡すのをその本分とし、宗教を離れて武士道なく、武士道と宗教とは、合一不離にして、武士道の命運は、一に宗教によりて始終して居るものであります。武士道が宗教と關係があるといふよりも、武士道は宗教の一分身といふ姿になつて居ります。

我が武士道も、宗教と關係が少くないのでありまするけれども、寧ろ宗教を支配し、之を利用し、自己の發展に供して居りまする。神道の思想は、武士道の淵源となつて居るものでありますれば、武士道と關係があること勿論でありまするが、武士道發達の過程に於て、最も武士道と密接なる關係を有するものは佛教であります。而して、佛教の數ある宗派の中でも、殊に多大なる影響を與へたのは禪宗であります。一體、禪の教義といふものは、文字に拘泥することなく、簡單直截にして物事に執着せず、瀟洒淡泊にして、繁褥なる虛飾を去り、依賴心を排して、冥想默思、大悟徹底、自力特行、安心不動、よく大勇猛心を發起せしむる特長があるので、武士の好尙と吻合し、武士の志操を敎養し、武士道の發達に資したことが、少くないのであります。隨つて、古來、名ある武士にして、禪に參し、工夫辨道して心膽を練り、潛勢力を涵養したものが非常に多いのであります。源實朝の榮西禪師に於

ける、北條泰時の普寧禪師、道元禪師、聖一禪師に於ける、北條時宗の祖元禪師に於ける、北條貞時の寧一山禪師に於ける、菊池武時の大智禪師に於ける、藤原藤房の關山禪師に於ける、足利尊氏の夢窓國師に於ける、細川頼之の通幻禪師に於ける、太田道灌の泰叟和尚に於ける、上杉謙信の天室和尚に於ける、蜷川親當の一休禪師に於ける、大内義隆の玉堂和尚に於ける、前田利家の大透和尚に於ける、伊達政宗の虎哉和尚、東獄和尚に於ける、柳生宗矩の澤庵禪師に於ける、山鹿素行の隱元禪師に於ける、大石良雄の正眼禪師に於けるが如き、卽ちこの例であります。

眞宗は、信心以外、一切の形式を打破し、肉食妻帶をも禁ずることなく、念佛稱名を以て成佛の手段とし、頗る通俗易行でありまするから、武士で之を信ずる者も多かつたやうであります。而して、その主張する報恩の觀念は、武士が主君に對して、一身一家を捧げ、恩義に報ゆる忠誠と符合し、武士道に資するところが少くなかつたのです。日蓮宗が立正安國を標榜して、國家主義的色彩を帶び、我が國民思想に吻合する所があり、且勇壯にして、武人の好尚に通ずるものがありましたので、是又、武人の間の信者が多くて、武士道の發達を促したことも少くなかつたのであります。

併し、此等の佛敎は、武士道の發達に資したる滋養劑に過ぎず、武士道は主的地位に立つて、宗敎を利用したものに外ならぬのであります。それで、宗敎の關係からいふと、我は宗敎に對して主的關係に立ち、宗敎を支配し、之を使役して居りますのに、彼は宗敎に對して從屬的地位に居り、宗敎に

支配せられ、使役せられ、その命脈を宗教に扼せられ、全く正反對なる事情の下にあるのであります。

## 七

西洋武士道では、男子が七歳に達しますると、之に家庭教育を授けましたが、家庭教育は、宗教々育と德育とを專らとしました。さて、十五歳の頃になりますると、父母の家を出でて他の武士の家に見習に入り、眞の武士的生涯を營み始めまするが、之を花公子と申します。花公子は、丁年に達しまれは、武裝式といふ莊重なる儀式の下に、武士の團體に加入し、始めて一人前の武士となりまする。而して、武士となるには、階級に何等の制限がなかつたので、何人と雖も、武士の團體に加入することが出來たのであります。

我が國では、武士となるには、武士の家に生れたものに限られて居りますしたが、武士の教育は、家庭教育と武將の教育との兩面に分つことが出來、教育の內容から見ると、精神の修養と身體技術の鍛錬とに分つことが出來ます。而して、これは何れも、非常に峻嚴なものでありました。

武士の教育には、儒教の教義を配することが少くなかったので、武士は、一面に於て、武事を修練すると同時に、學問に志し、人倫の道を解し、品性を高め、氣節を養ひ、人格を高め、戰士として優秀なる資格を具備すると同時に、人物としても、優秀なる資格を具備して居りました。

西洋武士の教育は、宗教的典禮的で華奢、我が武士の教育は、家族的修練的で質素、彼は感情を重んじ、比較的に學問に暗く、武人としての教養を主として居りまするが、我は意志を重んじ、比較的に、學問に力を注ぎ、武人としてのみならず、紳士としてふさはしい品格力量を具備せんことを力めたやうであります。

## 八

武士道は、武士社會を律する峻嚴なる道義であります。隨つて、武士にして、若し義務を怠るか、又はその體面を傷くるやうなことがありまするとき、相當なる制裁を加へたのであります。

我に於ては、武士に刑罰を加ふるに當つても、つとめて、その名譽を尊重し、極めて破廉恥なる罪を犯すとか、又は、許し難い罪惡を犯した場合の外は、一命を奪ふにしても、切腹の制を設けて、その名譽を尊重しました。武士にして切腹を課せらるゝは、他の刑罰を課せらるゝよりも、遙に名譽でありました。又敵討も、切腹と相待つて、我が國に特有なる制度でありました。封建時代に於ては、刑法の設備が十分でなかつたので、殺戮せらるゝやうなことがあると、被害者の親近者が、仇敵を討滅することによつて、社會の秩序を保持したのであります。即ち、仇敵は、我が君父を殺害したものであるから、我は天に代つて、之を討滅する。それで、君父の仇を報ずるのは、君父に忠孝な所以で

あると解釋し、正義の觀念を滿足したのであります。

西洋武士道に於て、制裁は緩漫ではありませぬ。武士にして本分に背ける行爲があると、武士の團體から除名放逐しました。而して、この際は、公衆の面前で侮辱を加へ、その武裝を解除して放逐することになつて居ります。

## 九

我が國の武士は、戰その者を名譽とし、一騎打の格鬪に手柄を立てんことを心掛けましたので、扮裝なども、成るべく目につき易いやうに、きらびやかなる色彩形裝を選んだのであります。鎧、直垂、弓、矢、太刀、槍、馬具に至るまで、形裝色彩が多數で、實用上のみならず、外觀の上にも、頗る意匠を凝しました。又、武器を愛好しましたが、就中、刀劍は、武器の至粹として、「武士の魂」を以て擬せられ、破邪斬魔、仇敵討滅、自家防衞の具とし、之が良用を心掛けました。それで、刀匠が之を作るに當つても、單なる武器としないで、實に一種の美術品として製作し、刀匠は單なる工人ではなく、靈腕ある美術家でありました。彼等が刀劍の製作に從事するや、精進潔齋し、滿身の心血を傾倒し、その精魂氣魄を鍊鐵に吹込み、鍛鍊幾十日の勞苦を經て、始めて出來上つたものでありまするから、日本刀が神威を藏し、靈氣を帶ぶるのは、當然であります。

泰西武士の扮裝にも、固より、裝飾がないでもありませぬけれども、彼等は、外觀よりも實用を重んじました。色彩形裝の如きも、決して、我が國のそれのやうに華かでなく、甲冑、弓、矢、劔、戟のやうなもので、單簡で輕便實用を旨としたのであります。又、武士が武器に對する愛好も、我が國の武士のやうに甚だしくありませず、刀劔の如きも、一個の武器たるに過ぎずして、刀匠は一個の工人たるに外ならなかつたのであります。

## 一〇

武士は、身命を棄てゝ、戰鬪に從事すべきものでありますから、剛健勇邁にして、困苦に堪へ、窮乏を忍び、克己自制して、心身の鍛錬を心掛け、隨つて、女性に溺るれば、自ら惰弱の弊を釀すといふところから、女の爲に心を奪はるゝといふ弊がないやうに力めました。

女子は獨立の權能を失し、戰爭に役立たないところから、自然、男子の權勢が增大し、女子は、男子のために、殆ど絕對的の服從を要求せられ、女子も亦、甘んじて、その良人の爲に、滿身の心血を捧げ、その任務を全うせんことを力めました。日本婦人は、從順でありましたけれど、その心事は極めて烈で　如何なる困難をも忍び、誘惑にも打勝ち、萬一の場合には、身命を棄てゝ、壯烈なる働をしたのであります。

泰西に於ては、婦人の地位は甚だ高く、男子と同等に交際し、何事も積極的でありましたので、稍々お轉婆の傾向がありました。又、武士の方でも、弱を助け强を挫くといふ觀念から、婦人を尊び、之を保護するのを任と致しましたので、貴婦人は、社會的に非常なる勢力を有し、大抵の武士は、自分の崇拜する婦人を定め、その者の標章となるべき手袋又は手巾の如きものを、甲冑又は楯などにつけて、戰鬪に從事するのを常としたのであります。試合等に於ても、婦人は、自ら負にする武士の爲に應援し、その勝利を熱心に希ひ、若し武士が勝利を得ると、自ら、之に褒賞を授けました。その他、戀愛に對しても、頗る自由の態度を取り、之を拘束することが少くなかつたのであります。それで、婦人の社會的地位、及び、武士道と婦人との關係の如きは、我と彼と、正反對になつて居るのであります。

## 一一

管見によりますると、我が武士道の長所は、

感激的直覺的なること。

公明正大なること。

心身を鍛錬して剛强ならしむること。

沒我献心的なること。
自信自重の風あること。
現世的實行的なること。
學問修養に心掛け、識見品格を高めしこと。
等であり、その短所は、
階級的因襲的なること。
權利思想乏しきこと。
智的觀念乏しきこと。
公共心乏しきこと。
精神を過重し、物質を閑却せしこと。
等であるやうに思ひます。又、泰西武士道の長所は、
信仰的にして敬虔の念厚きこと。
公明正大なること。
心身を鍛錬して剛强ならしむること。
義務的觀念强きこと。

秩序規律を重んずること。

等で、その短所は、

宗教に隷屬支配せられしこと。

學問の素養乏しかりしこと。

形式に拘泥せしこと。

過度に婦人を尊崇せしこと。

等であるやうであります。而して、此等の事項については、實は、比較評論を試みたいのであります、けれども、少し面倒で話が長くなりまするから、茲では、單に項目を擧ぐるに止めて置きます。

## 一二

我が國の武士は、四民の上位を占めて、自ら標榜することが高く、一世の儀範として、衆庶を指導しました。それで、武士は、社會道義の建設者にして、又、その維持者でありました。而して、社會は、萬衆の集團にして、武士は、その中堅となつて居りましたので、武士氣質は、何時しか、平民社會にも及びて、衆庶を感化したのであります。明治維新と共に、封建制度は破壞せられ、武士の階級がその實を失ひ、四民平等の聖代となつてから、武士は、民間に入つて、庶民と共に、凡百の職業に

從事し、武士道の精神を世に普及し、又、國民皆兵の制度によつて、我が國民は、悉く兵役の義務を負ひ、軍籍に身を置くことゝなりましたので、從來に於ける武士道の嫡系は、軍隊に繼承し、今も尙、昔のやうに、我が軍人は、心身の鍛錬、技術の錬磨に力を盡し、君國の擁護に任じて居ります。我が軍が、日清日露の戰役及び日獨戰爭に於て、連戰連勝、向ふところ前なく、驚天動地の壯烈なる活劇を演じ、絕倫の武威を示し、至大の功績を擧げ、世界の耳目を聳動せしめたる所以のものは、固より、他にも原因がありまするけれども、主として、この武士道的精神が發露活躍した結果であらうと思ひます。その他、現代我が國民の情態に就て見ても、

忠君愛國の念厚きこと。

勇武任俠なること。

禮儀を重んずること。

廉恥の念强きこと。

名譽を重んずること。

寬厚仁愛の風あること。

節操を重んずること。

信義を重んずること。

等の傾向が著しいのは、我が國民本來の性質によるところがあるとはいへ、一面に於て、武士道が、此等の道義德性を涵養掬育して、吾人に遺したる賜であらうと思ひます。

西洋でも、十三世紀頃から、武士道は漸く衰運に向ひ、十八世紀頃には、その形式は殆ど廢滅に歸しましたけれど、その精神遺芳は、決して消滅せず、郁々として世を薫化し、大いに見るべき影響を與へて居るのであります。

弱者を擁護すること。

主權者に對して忠誠を盡すこと。

名譽を重んずること。

正義を嘉し　虛僞を惡むこと。

義勇を尙ぶこと。

等が、今も尙、彼の民族の間に存在して居るのは、武士道が傳へたる遺產に外ならないのであります。此等の德義を中心として組織せられたる西洋の所謂紳士道は、卽ち武士道の精神を繼承したものであります。

一三

十九世紀の初期からその末期に到るまで、國家的競爭の雰圍氣は、殆ど歐洲大陸に限られたかの觀がありましたけれど、二十世紀に入つてからは、東洋にも波及し、世界は頗る多事となりました。我が國は東洋の孤島として存立して居りますので、過去に於ては國家的競爭の大渦中に存在しなかつたけれど、今や世界一等國の班に列し、世界的競爭の大渦中に投じ、萬國を相手に競爭をしなければならぬ立場にあります。而して、この難局に處するには、最もよく時勢に適應すると共に、最もよく我が國家の存立に都合のよい資格を具備せしめ、物質的實力と精神的實力とを調和充實せしめ、平和の時代にも、戰爭の場合にも後れを取らないやうに、敎養鍛錬して置かなければなりませぬ。武士道は過去の日本が生んだ最も有爲健全なる天惠の寵兒で、その精神は、萬代不易の鐵律として、我が國民活動を支配すべきものであります。武士道の形式の方面は、固より封建制度の廢滅と、運命を共にすべきものであります。たとへば、切腹とか仇討のやうなものは、即ち是に屬するものであります。けれども、その精神に至りては、どこまでも保存して、之を採用しなければなりませぬ。我等は、凡百の事實に、すべて武士道的精神氣魄を應用し、國運の隆興、國民の發展を促さなければなりませぬ。武士道的精神の充實發展は、日本民族の自我實現であります。我が國家民族をして、適者たり、優者たらしむるに就て、吾人は、是非とも、武士道的精神氣魄と品格と實力とを以て、奮勵努力しなければならぬことゝ思ひます。

西洋武士道は、基督教的軍制でありまするから、西洋諸國に對する關係は、我が武士道が、國家民族に對するやうに、緊密痛切でないやうでありまするけれども、それが現代西洋人に遺した感化は少くないのであります。殊に、國家的競爭に火花を散らして居りまする今日では武士道的精神の活用の必要を感ずることが痛切であります。隨つて、西洋武士的精神の保持活用も亦、西洋民族に取つて、大切なる問題であらうと思ひます(完)。

## ◎新著紹介（一）

**○鷲尾順敬著　鎌倉武士と禪**　東京帝國大學史料編纂係に在りて、多年佛教史の研究に從事せらるゝ同氏の事なれば、斯る小編と雖も、その內容豐富にして、烱々たる史眼敬服に堪へざるものあり、鎌倉武士が如何に禪門に由りて修養し、禪の信仰に由りて其武士道を練り上げしかの史的經路を知らんとする者の是非一讀を要する良書なり。（東京市小石川表町、日本學術普及會發行。定價八十錢）。

**○山田新一郎著　神代史と中國鐵山**　著者本書に題して曰く、「本邦產鐵の研究は神代史上重要なる關係を有す」……「學界の參考に供せんが爲めに年來懷抱の一端を記述」せりと、本書一部實に引照細微に亘れる考證的研究なりとす。

**○感恩講誌及圖卷**　本書は秋田縣に於て獨特の發達を爲せる社會事業の報告書にして、今より百年以前より我國に早く既に貧民救助孤兒院事業が其緒に就き、而て現今尙數十萬の資金を有して、その種事業に着き成功しつゝあるものは此感恩講なる事實を語れるもの、是れ本書なり。這種事業に興味を有せらるゝ人士の一讀に價す（非賣品）